
失った記憶番外編

W I S H 0 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失った記憶番外編

【Nコード】

N97380

【作者名】

WISH02

【あらすじ】

失った記憶の番外編です

失った記憶を読んでみてから読んでください。

新一と蘭の結婚式のお話です。

挨拶（毛利家）（前書き）

あらすじにも書いてありましたが失った記憶を読んでから読んでみてください。

挨拶（毛利家）

新一が蘭に展望レストランでプロポーズしてから三日後に新一は蘭の両親に結婚の挨拶に行くことと決意した。

ー毛利探偵事務所ー

蘭「ねえ！お父さん！明後日時間空いている？」

小五郎「あん？午後1時なら空いているがどうした？」

蘭「実は明後日新一と私がお父さんとお母さんに大事な話をしなきゃいけないの！」

小五郎「・・・」

俺は何かを悟ったみたいで黙り込んでしまった。

俺の勘だと多分探偵ボウズは結婚の挨拶に来るだろう。

俺はそう思った。

蘭「お父さん？」

小五郎「わかった！午後1時にここの事務所だな！」蘭「ありがとう！お父さん！」

蘭は俺に笑顔でそう言った。

ーそれから三日後ー

30分前には俺は探偵事務所にいた。

コンコン！

ガチャ！

探偵事務所のドアが開いた。

小五郎「英理か！仕事は終わったのか？」

英理「ええ！思ったより早く終わったから来たのよ！」

小五郎「そうか！」

それから10分後に探偵ボウズと蘭が事務所に入ってきた。

新一はしっかりと濃紺のスーツに青いネクタイをしっかりと締めている。新一はしっかりと身だしなみを整えており緊張しているせいで動きがぎこちない。

新一「失礼します。」

小五郎「まあ座れ！」

新一と蘭はゆつくりとソファ―に座った。

小五郎「んで？話があるんだらう？」

新一「はい！ら、蘭さんと結婚させてください！」

新一ははつきりと大きな声で言った。

小五郎「……………」

俺は探偵ボウズの話聞きしばらく黙つたままだった。

新一「確かに僕は蘭さんやお二人を騙して江戸川コナンと名乗り、この事務所居候してました。そのせいで何度か蘭さんの涙を何度も見てきました。ですが僕は蘭さん以外愛する女性はいません。ですから蘭さんとの結婚許してください！」

新一は頭を下げて言った。

蘭は新一のその姿を見て涙を流してしまいそうだった。

蘭「新一」

小五郎「蘭はいいのか？新一で？」

父親が一番自分の娘の幸せを望んでいる。

蘭「新一がいい。新一じゃなきゃダメなの！」

小五郎「そうか……………」

俺は少し黙り込んでしまった。

小五郎「蘭のこと任せたぞ！」

新一「ありがとうございます！」

蘭「お父さんありがとう！」

私は嬉しさのあまり涙を流してしまった。

新一「ではこれで失礼します。」

小五郎「おい！新一！今用事入っていないか？」

新一「え？入っていません。」

小五郎「じゃあ俺と二人きりで話がある。蘭と英理は席を外していてくれないか？」

英理「じゃあ蘭下のポア口でお茶でも飲みましょう？」

蘭「なんだろう？新一と二人きりで話して？」

私は不安になってしまった。

英理「大丈夫！新一君に任せなさい！」

蘭「うん！」

私と蘭は下のポアロでお茶を飲むことになった。

小五郎「二人とも行ったか？」

新一「はい！行きました。それで話して？」

小五郎「お前は蘭を幸せにさせることはできるのか？」

父親である俺が一番気になることを聞いた。

新一「はい！必ず蘭を幸せにさせます。」

小五郎「そうか！それなら俺は心置きなく蘭をお前の花嫁に送ることがができる。俺がこういうことを言うのは嫌だが蘭を頼んだぞ！」

新一「はい！」

新一は力強く俺に返事した。

小五郎「じゃあ話も終わったし、下に行くか！」

新一「はい！」

俺と新一は下のポアロに行った。

「ポアロ」

ガチャ！

ドアの開く音がして新一とお父さんが入ってきた。

蘭「新一！」

私は真つ先に新一のいるほうに向かった。

蘭「お父さん新一と何を話していたの？」

小五郎「何でもねえよ！」

蘭「何よ！それ！」

私の口調がきつくなつたから新一が止めに行つた。

新一「まあまあ！蘭ちよつと話してただけだよ！」

蘭「本当に？お父さんに酷いこと言われていない？」俺は蘭が心配する姿を見て可愛いなと思つた。

新一「本当だよ！」

蘭「ならいいけど。」

新一「では僕はこれにて失礼します。親子水知らずで話がしたいんでしようから。」

英理「新一君有希子たちにはこのこと言ってるの？」

新一「はい！後日また僕の両親に挨拶に行つてきます。それではおじさんおばさん話を聞いてくださいますとありがとうございます。」

小五郎「おう！」

俺は新聞を読みながら返事をした。

新一「それじゃあまたな！蘭！」

俺はそう言つて軽く蘭と口づけをした。

蘭「またね新一！」

私は顔を真つ先に染めてそう言った。

小五郎「あ！探偵ボウズ俺の娘に何しやがる？」

英理「あら！あなたいいじゃない？蘭と新一君は婚約者なんだから！」

小五郎「まあ！新一なら構わん！」

英理「あら！あなたがそう言うなんて意外ね！」

小五郎「じゃあねーえだろう？もう蘭と新一は結婚するんだから！そのかわり新一以外の男は蘭の唇を奪うのは許さん！」

英理「まあ！蘭は早めに式場やウェンディングドレスと日程早く決めておくのよ！」

私と小五郎は新一君を見送った。

未来の蘭の旦那さんを。

挨拶（毛利家）（後書き）

感想待ってます。

挨拶（工藤家）（前書き）

今までセリフの前に人物の名前を書いてきましたが今回からは人物の名前は書いておりません。

挨拶（工藤家）

新一は蘭の父親と母親に結婚の挨拶をしに行ったその日の夜にアメリカにいる優作と有希子がいる家に電話をした。

「もしもし？母さん？」

「あら！珍しいわね！新ちゃんから電話を掛けるなんて何かいいことでもあったの？」

「じ、実は俺今日蘭の両親に結婚の挨拶をしてきたんだ！で蘭の父さんと母さんは結婚賛成してくれたんだ！」

「あら！良かったじゃない！で？私たちに結婚の挨拶をしたいのね？」

「ああ！父さんと母さんの都合のいい日でいいから一旦日本に帰ってきてくれないか？」

「わかった。優作と私は今週の日曜日なら都合がいいから日曜日でもいい？」

「ああ！じゃあその日には帰ってきてくれ！」

「わかったわ！」

ガチャ！

新一はそう言つて電話をきった。

「有希子誰からの電話だ？」

優作は私に聞いてきた。

「新ちゃんからよ！今日蘭ちゃんの両親に結婚の挨拶をしに行ったみたいよ！」

「そうか！」

「ああ！やつと蘭ちゃんが新ちゃんの妻になるのね！嬉しいわ！」

「そうだな！」

優作はそう言った。

—日曜日—

新一と蘭が工藤邸に来る一時間前に優作と有希子はいた。

それから20分後に新一と蘭が来た。

新一はしっかりと身だしなみを整えていた。

「ところで新一私と有希子をここに呼んだのは何か大事な話があるからだろ？」

父さんは何かを悟ったように尋ねた。

「ああ！じ、実は俺蘭と結婚することになったんだ。三日前に蘭の両親に結婚の挨拶をしに行つて結婚は許してもらつたから父さんと母さんに結婚の挨拶をしに来たんだ！」

「私は賛成よ！新ちゃん和蘭ちゃんが小さい頃から蘭ちゃんが新ちゃんの嫁さんになつてほしいなと思つていたから！」

母さんは微笑みながら俺に言つた。

「ふ！反対はしないさ！新一しかし蘭君と結婚するということとはこれから生まれてくる子どもものことも考えなくちゃいけないんだぞ！」

「わかつてる！必ず蘭を幸せにする。だから蘭と結婚したいんだ！」

「わかつた！必ず蘭君を幸せにするんだぞ！」

父さんも微笑みながら俺に言つた。

「ああ！ありがとう父さん！」

「蘭君こんな新一をこれからもよろしく頼むよ！新一は蘭君以外には目には入つていないから」

父さんは蘭にもそう言つた。

「はい！新一と一緒に幸せになります！」

そして有希子さんが新一に一番気になることを聞いてきた。

「ねえ！新ちゃん 蘭ちゃんになんてプロポーズしたのよ？」

「べ、別にいいじゃねえかよ！」

新一はそっぽを向いた。

「つまらないの！じゃあ蘭ちゃん教えて！」

母さんは今度は蘭に聞いてきた。

「え？お前のこと愛してる。この地球上の誰よりもだからこの俺と結婚してくれ！でした。」

「フーン？」

母さんは俺をからかうような顔をしてきて俺の顔を覗いてきた。

「あら！照れることないじゃない！蘭ちゃんとは一緒にお風呂入ったんでしょ？」

「お、お風呂？」

蘭は顔を真っ赤に染めて母さんに聞いた。

「阿笠博士から聞いたわよ！新ちゃんがまだコナン君だった頃と一緒にお風呂に入ったて！」

「そういえば！」

蘭は俺を覗んだ。

「あ、あれはお前が無理やり」

俺は弁解した。

「でも入ったことは入ったんでしょ？」

「だーから！お前が誘ったんだろー！」

新一と私の些細な口喧嘩を聞き、優作さんと有希子さんは笑い、新一をからかった。

「あら！新ちゃん誘惑に負けちゃったのね？」

「ほーお！新一もまだまだ子どもだな！」

父さんと母さんは思う存分俺をからかった。

二人の長いからかいが終わった。

やっと解放された気分になった。

「新ちゃん！蘭ちゃんに無理させちゃダメよ！」

「そうだぞ！新一必ず蘭君を幸せにするんだぞ！」

父さんは俺にそう言った。

「ああ！わかつてる！絶対に蘭を幸せにする。」

「じゃあ優作邪魔な私たちは今日はどこかのホテルに泊まるうか？」

「そうだな！そうするか？」

「何でわざわざホテルに泊まるんだよ？」

俺は気になったから母さんに聞いた。

「あら！新ちゃんと蘭ちゃんが少しでも甘い夜を過ごさせるためよ

！」

母さんの言葉で俺と蘭の顔は真っ赤になった。

父さんと母さんが家を出たあとすぐに蘭が俺に話しかけてきた。

「ねえ！新一やっと私たちは夫婦になるんだね？」

「ああ！絶対に幸せにする！」

俺は蘭にそう言ったあと蘭と甘い口づけを交わした。

挨拶（工藤家）（後書き）

感想ください！

決定（前書き）

相変わらずの駄文です。

決定

新一と蘭が新一の両親に結婚の挨拶をしに行った三日後、蘭は新一に内緒で新一の家に来た。

―工藤邸―

五月四日午前6時私は新一の家に来た。

私はしばらく新一の寝顔に見とれていた。

私は新一に気づかれぬようにそっとキスをしようと顔を近づけたその瞬間急に新一が起きた。

「ウ、ウーン！」

私は急に新一が起き出したからびっくりしてしまった。

「あ！ごめん！起こしちゃった？」

「ら、蘭？どうしたんだよ？」

俺は今日なぜ蘭がここに来たかわからない。

「新一？今日何の日かわからない？」

「わからない。」

俺は蘭にそう言った。

「今日は五月四日。新一の誕生日でしょ？」

「あ！そうだった！忘れてた！」

「もーう！たまには覚えていてよね！」

「悪い悪い！サンキューな蘭！」

「どういたしまして！新一今日から21歳でしょ？私二つプレゼントを用意したんだ！」

「二つも？」

新一は私に聞いてきた。

「まず一つ目ははいこれ！まだ寒いから手袋ね！」

「お！サンキュー！で？二つ目で？」

「二つ目はこれよ！」

私は頬を真っ赤に染めて言って

c h u

新一にキスした。新一は蘭が急にキスしたから顔が真っ赤だ。

「ら、蘭？」

「21歳の誕生日おめでとう！新一！それと今日はもう一つ言わなきゃいけないことがあるんだ！」

「フーン？結婚式の日程だろ？」

「よくわかったわね！」

「蘭の考えていることぐらいわかるよ！で？いつにするんだ？」

「今日から一ヶ月後の六月四日でいい？」

「ああ！いいぜ！六月はジューンブライドだからな！その時期が一番いいかな？」

新一も納得したようだ。

「うん！じゃあ私はお父さんとお母さんにこのこと言っとかなきゃいけないから伝えに行くよ！」

「じゃあ俺は父さんて母さんに言っとくよ！それに服部たちにも言っとかなきゃな！」

「そうね！じゃあまた今度ね！私はもう帰るから」

「あ！送っていくよ！」

新一はそう言っすぐにパジャマ姿から私服に着替えた。

新一は蘭を送った。

「じゃあな！蘭！」

「うん！また今度ね！」

蘭は俺に輝くような笑顔を見せた。俺はそれに堪えきれず蘭にキスをした。

「もーう！」

蘭は顔を真っ赤にしてちよっとだけ俺を怒った。

俺はその蘭の姿を見て可愛いなと思った。

そして俺は自分の家に向かった。

予想外の

新一の誕生日を祝った翌日に服部君と和葉ちゃんが東京に来た。

―毛利探偵事務所―

私と新一は探偵事務所ですし、久しぶりに二人きりで話をしていた。

「なあ！蘭！」

「何？新一？」

「あ、あ、あ！結婚式の式場どこにするんだ？」

「ああ！それね！それは軽井沢の別荘のすぐそばにあったあの教会でいい？」

「ああ！白鳥警部のお宝ワインを保管していたあの別荘か？」

「うん！」

「わかった！そこにしよう！」

「よう！工藤元気にしとったか？」

「蘭ちゃん久しぶり！」

「は、服部に和葉ちゃん？どうしたんだよ？」

「いや久しぶりに東京に来たかったかんや！」

服部はそう答えた。

「ごめんな！工藤君に蘭ちゃん連絡もせんに東京に遊びに来ちゃつて」

和葉ちゃんは謝った。

「いいんだよ！和葉ちゃんが謝らなくても、それよりも服部何で和葉ちゃんが謝っていてお前が謝らないんだよ？」

「いや！工藤ほんまにすまん！」

「もういいよ！新一許してあげて？」

蘭は俺に上目遣いと言った。

「蘭がそう言うなら別に俺はいいが！」

「あ！そうだ！」

蘭は急に話を変えた。

「ねえ！和葉ちゃん久しぶりに私と和葉ちゃんだけでどこか出かけない？」

「おいおい！蘭普通は俺と出かけるんじゃないかねえのかよ？」

「じゃあ服部君と出かければいいじゃない！」

おいおい何言ってるんだ蘭俺はそう思った。

「わあーたよ！なるべく早く来いよ！」

「わかってるよ！和葉ちゃんじゃあ行こう？」

俺と服部は呆然としながらも蘭と和葉ちゃんを見送った。

そして俺が蘭に最後に一言。

「おーい！蘭！」

「何？」

「浮気すんなよ！」

「バ、バカするわけじゃないじゃない！私は新一以外の男は興味ないんだから！」

「サンキューー！蘭！気をつけて行ってこいよ！」

そう言ってる俺と服部は蘭と和葉ちゃんを見送った。

予想外の（後書き）

感想ください！

秘密1（前書き）

感想ください！

秘密 1

蘭と和葉ちゃんは久しぶりに二人きりで出かけることになった。

出かけている間に俺は蘭夕食を作ろうと思った。

「おい！工藤俺らもどこか行かへんか？」

「なあ、服部蘭は俺が記憶喪失だったとき俺にいろいろと気を遣ってきてくれたから今日は蘭の為に夕食を作ろうと思っているんだ。」

「工藤 わかった！俺も協力したる！」

「サンキュー！服部！じゃあお前はちよつとこの事務所を掃除しといてくれないか？俺は食材とか買い出しに行ってくるから！」

「わかった！任せておけ！」

「じゃあ俺は買い出しに行ってくるから！」

そう言つて俺は買い出しに出かけた。

一方蘭と和葉は二人きりでウエンディングドレスを見に行っていた。
「なあ蘭ちゃん私と二人きりで出かけた理由でウエンディングドレスを見に行きたかったからか？」

「うん！だつて新一には本番までには見せたくないもんウエンディングドレス。ごめんね付き合わせちゃつて！」

「ええんよん！蘭ちゃんその気持ちようわかる！私やって平次と結婚するときだったとき平次には本番までにはウエンディングドレスを見せたくなかつたもん！」

「だよね！」

そこで偶然蘭ちゃんのお母さんに出会った。

「あら？蘭どうしたの？」

「お、お母さん？お母さん何でここにいるの？」

「ここで事件の容疑者が私を依頼してきたの！まあ事件は解決したけど！そういう蘭こそどうしたのよ？」

「ウエンディングドレスを見に来たの！でも新一には本番までには見せたくないから和葉ちゃんと一緒に来たの！」

「なるほど！じゃあこれなんかどうかしら？私が使ってたウエンディングドレスよ！」

「え？私なんか似合うかな？」

「似合うに決まっているでしょう？蘭は綺麗なんだから！」

「そりゃで！蘭ちゃん似合うに決まってるやない！」

「蘭試着してみたら？」

「うん！じゃあ試着してみるね！あのこのドレス試着できますか？」

私はこの店のスタッフに聞いた。

「はい！試着できますよ！」

私は試着してみた。

「蘭綺麗よ！似合ってるじゃない！」

「そうかな？」

私は自信なさげにそう言った。

「蘭ちゃんほんまに似合っとる！」

「あ、ありがとう！」

私は頬を真っ赤に染めてそう言った。

「じゃあ蘭もう用事を済ませたみたいね？」

「うん！」

「じゃあ帰りましょう？事務所まで見送るから！」

私はそう言って蘭と和葉ちゃんを事務所まで見送った。

秘密2（前書き）

秘密1の新一と服部目線です。

秘密 2

一方、新一と服部は蘭の為に夕食を作ろうとしていた。

「毛利探偵事務所」

「ただいま！」

「おう！工藤おかえり！掃除しといたで！」

「おお！すごくきれいになってんじゃねえか！サンキューな服部！」
「礼を言う必要はないで！ところで工藤何を作るんや？」

「そうだな！蘭が好きなのはナポリタンだからそれを作るための食
材は買ってきたから！」

「おう！じゃあ早速作ろうやないか！」

「その前にナポリタンのレシピ本を買ってきたからそれを見ながら
作るぞ！」

「おう！」

そうして俺と服部はレシピ本を見ながらナポリタンを作り始めた。
なんとかナポリタンは作り終わった。

そのあとにサラダを作ることにした。

「痛え！」

「どないしたんや？工藤？」

「どうやら包丁で指を切っちゃまったようだな！」

「大丈夫か？」

「ああ！大丈夫大丈夫！ちよつと指を冷やすから」

俺はそう言っ指を冷やした。

ピンポン

事務所の呼び鈴が鳴った

ガチャ！

俺はドアを開けた。

「ただいま！」

「おかえり！蘭！」

「あら？新一は服部君と出かけなかったの？」

「ああ！ちよつと訳あつてな！」

「あ！」

蘭はすぐに気がついたようだ。テーブルの上には料理がたくさん用意されていることが

「ねえ新一！この料理てまさか？」

「ああ！俺と服部が作ったんだ！」

「でもどうして？いつもは面倒腐ってあまり自分から作らないのに。」

「

「俺が記憶喪失だったときにお前は俺を気を遣っただろう？そのお礼」

「し・・・新一。ありがとう！」

「さあ！冷めないうちに食べちまおうぜ！」

「うん！」

そのあと私はすぐに気がついた。新一が一瞬だけ顔をしかめたことを「新一どうしたの？」

蘭は心配そうに俺に聞いてきた。

「何でもねえよ！」

俺は蘭を心配させたくないためにとっさに嘘をついた。

「嘘！けがでもしたんでしょう？」

蘭に問い詰められてしまい、俺は白状した。

「蘭には叶わねえな！」

俺は蘭に包丁で指を切ってしまったのを蘭に教えた。

「ちよつと指を切っちゃったなら早く見せてよね！」

俺は蘭に従い、素直に指を見せた。

「もーお！しょうがないなあ！」

蘭はそう言つて俺の指を蘭が舐めた。

「な？」

俺は顔が赤くなつてしまった。

そのあとに蘭は新一の指に絆創膏を貼つた。

「これで大丈夫ね！今度からあまり無茶しないでね！」
蘭は上目遣いで俺にそう言った。

「おう！」

「おーい！工藤顔が赤いで！」

「うるせえ！」

俺は服部に思いきり怒鳴った。

そのあとすぐに俺たちは夕食を食べ始めた。

「美味しい！新一！」

「だろ？」

「ほんまに工藤君うまいで！」

「サンキュー！」

「おーい！三人とも俺がいることを忘れるな！」

「あ！ごめんね！服部君」

「ええんやで！蘭ちゃん平次に謝らなくても！」

「そうかな？」

「ところで工藤？お前いつに結婚するんや？」

「ああ！六月四日で場所は軽井沢の別荘の近くにあったあの教会だ

よ！」

「ああ！白鳥警部が大切に保管していたお宝ワインの別荘やな？」

「ああ！」

「それに六月はジュースブライドやないか！」

服部は驚いた。

「蘭ちゃんと工藤君には幸せになってもらいたいからな！」

和葉ちゃんはそう言った

「新一料理美味しかったよ！ありがとう！」

「ああ！今度もまた作ってやるよ！」

俺は蘭に笑顔でそう言った。

あまりのラブラブの雰囲気か漂っていてからかおうとしていた服部と和葉はからかう雰囲気なくなってしまうた。

秘密2（後書き）

誰か感想ください！

結婚式前日

それから一ヶ月後ついに結婚式前日になった。

しかし新一はその日半日事件の調査で蘭を一人にしてしまった。

ー工藤邸ー

ピンポーン

午後9時工藤邸の玄関のチャイム音が鳴った。

「あ！新一帰ってきたわね！はい！」

可愛らしい蘭の声が工藤邸に響いた。

「ただいま！蘭！ごめんな結婚式の前日なのに半日間お前を一人にさせちゃって」

「やだ！謝らないですよ！事件だったんでしょ？」

「ああ！」

「ほつぺた冷たい寒かったのね？」

「ああ！もう六月なのにまだ寒いぜ！温めてくれよ！」

蘭はクスと笑いどうやって聞いた。

俺は何も答えずに蘭の唇を奪った。

「うーん！」

蘭は苦しそうだった。

新一はゆっくりと唇を離れた。

「温まった？」

蘭は優しく聞いた。

「ああ！温まったぜ！」

「もう時間遅いけどご飯食べる？」

「ああ！すげえ腹が減った」

「わかった！今すぐ作ってあげるから何が食べたい？」

新一は考え始めた。

「ハンバーグ！」

新一は笑顔でそう答えた

「新一いつも私が何食べたいか聞いたらハンバーグよね！確かコナンくんだったときもそうだったよね？」

「別にいいじゃねえーか？好きなんだから！」

「クス！はいはい！わかりました。今すぐ作るからゆっくり休んでて！」

「おう！」

新一はお言葉に甘えてリビングでゆっくりと休むことにした。数十分後蘭の手作りハンバーグは完成した。

「お！うまそうだな！」

「ねえ！新一今日は事件の調査相当大変だったの？」

「ああ！今日は珍しく一日で三件も依頼があつたんだ！」

「へえーどんな事件？」

蘭は興味深く聞いてきた

「殺人事件と銀行強盗や浮気調査本当に疲れたぜ！」

「そうか！大変だったんだね？あ！ハンバーグ食べてみて！」

「ああ！」

新一は蘭の手作りハンバーグを食べた。

「うめえ！」

「本当に？」

「ああ！すげえうめえぜ！」

「ウフ ありがとう！」

私は可愛らしくお礼を言った。

「ねえ！新一？その頬の傷はどうしたの？」

「え？ああ！今日の依頼であつた銀行強盗の事件の犯人が振り回したナイフでちよつと切っちゃまったんだ！」

「ええ？もう！あまり無茶しないでね！」

chu

蘭は新一がけがしている頬にキスをした。

「な？」

新一は顔が真っ赤になった。おまけに新一の頬には少しだけ蘭のキ

スマークがついていた。

「あとは絆創膏貼るだけだね！本当にあまり無茶しないでよね！」

「ああ！」

新一は今になつても顔が真っ赤になつたままだった。

蘭は新一の頬に絆創膏を貼った。

それから新一は蘭と楽しそうに夕食を食べながらいろんな話をしていった。

そして新一が歯磨きをしてうがいをしたあとにさつき蘭に貼つてもらった絆創膏に小さく文字が書いてあることに気がついた。

《新一Love》と書いてあつた。

新一は顔がまた真っ赤になった。

そのことに気がついた蘭は不思議そうに新一に聞いてきた。

「新一？何で顔が赤いの？」

「ら・・・蘭この絆創膏の文字。」

「うーん？」

蘭は新一の頬に貼つてある絆創膏によく顔を近付けた。

「あー！」

どうやら蘭も気がついたようだ。

蘭も新一同様顔が真っ赤になった。

この絆創膏に書いてある文字は以前怪盗キッドが新一に変装して怪盗キッドの腕に貼つた絆創膏だ

しかもその事件だけがをしたコナンの頬にも貼つた絆創膏だ。

「ら・・・蘭。」

新一はやつと蘭に話しかけた。

「し・・・新一。この絆創膏絶対に明日の朝にはがしてよね！」

「わあーてるよ！結婚式に新郎が絆創膏なんて貼っていたら新郎の印象悪くしてしまうだろう！」

「そ・・・それに恥ずかしいよ！」

蘭は頬を真っ赤にしてそう言った。

「何で恥ずかしがるんだよ？俺たち結婚するんだから恥ずかしがる

「ことないだろう?。」

「もう! 鈍感推理オタク!。」

「何だよ?。」

「ねえ! 新一! もう寝よう? 明日朝早いから! 明日の朝に備えなきゃ!。」

「ああ! そうだな! じゃあもう寝よう!。」

新一と蘭はそう言って眠りについた。

当日（前書）

ついに結婚式当日です。

当日

新一と蘭はすぐに眠りについた。

ついに朝を迎えた。

チュンチュン

朝、雀の鳴く声が出た。

最初に起きていたのは蘭だった。

蘭は新一の為にまず朝食を作ることにした。

「

蘭の美しい鼻歌が工藤邸に響いていた。

新一は目を覚ました。

「おはよう蘭！」

新一は蘭にそう言ってから抱きついた。

「し……新一おはよう！ちょっと離してくれる？朝ご飯作れないよ？」

「あ！悪い！」

蘭はすぐに朝食を作った。

「新一いよいよだね！」

「ああ！」

「私新一に出逢えて幸せ！新一を好きになって幸せ！新一を愛することができて幸せ！」

「俺もそうだけ！蘭！蘭に出逢えてすげえ幸せだ！蘭を愛することができて本当に幸せだ！蘭と結婚できるなんて夢みたいだ！蘭俺と結婚してくれてありがとう！」

「新一……私こそこんな私と結婚するて決意してくれてありがとう！」

「何言ってるんだよ？俺はガキの頃からお前のことを好きな女性として見てきたんだぜ！ただ俺はそのとき素直じゃなかったけど！」

「し……新一ありがとう！私も子どもの頃から新一のことを好き

な男性として見てきたわ！」

「サンキューな！蘭！」

ピンポン！」

工藤邸のチャイムが鳴った。

「新一くん！蘭！早く会場に行こう！」

「うん！新一行こう！」

「ああ！じゃあ行こうぜ！俺たちの未来を祝う会場にな！」

「そのセリフキザ！」

「うるせえな！」

「ほらお二人さん行くわよ？」

新一くと蘭は私の車に乗り込んで軽井沢の結婚式会場に向かった。

――二時間後――

新一と蘭は軽井沢の結婚式会場に着いた。

「わあ！素敵なお教会だね！新一！」

私は笑顔で新一にそう言った。

「ああ！そうだな！だがこの教会よりもお前の笑顔のほうが素敵だよ！」

「もう！新一！」

「本当だぜ！」

「ありがとう！新一！」

私はこれから新一と幸せな家庭を築きます。

ただ少しだけ不安があります。

ただ今はそんな不安よりもこれからもずっと新一と一緒に居れる幸せがいつぱいだった。

「新一！幸せになるうね？」

「ああ！必ず幸せにしてみせる！」

俺は必ず蘭を幸せにしてみせると心から誓った。

当日（後書き）

次回は新一と蘭の控え室でのお話です。
二話に分けて更新します

控え室(蘭)(前書き)

控え室での蘭の話です。

控え室（蘭）

「新一と蘭が結婚式の会場に着いてから一時間後」

「蘭は自分の控え室にいた」

「コンコン！」

「控え室のドアを叩く音がした。」

「蘭！」

「園子が控え室に来てくれた。」

「園子！ありがとうね！わざわざ結婚式に来てくれて！」

「何言ってるの？親友の結婚式に来ない人なんて普通じゃないでしょ？礼を言う必要はないよ！」

「ありがとう！」

「蘭は笑顔で言った。」

「蘭！幸せになりなよ！」

「うん！新一と絶対に幸せになる！」

「本当に蘭は工藤くんには勿体ないぐらいだよ！」

「そうかな？」

「そうよ！こんな優しく綺麗な蘭を幸せにしなかったら私許さないわよ！」

「そんな綺麗だなんて！」

「本当よ！蘭！今もすごく綺麗だけど昔もすごく綺麗だったよ！」

「ありがとう！」

「蘭は輝いた笑顔で言った」

「ところで蘭！私まだ聞いていないけど！」

「え？聞いていないって何を？」

「プロポーズよ！プロポーズ！」

「プロポーズ？」

「まさか無かったなんて言うんじゃない？」

「うーん！無かったようなあったような！」

「ようじゃないわよ！教えなさいよ！」

「えー？」

「えー？じゃないわよ！」

「コンコン！」

また控え室のドアが叩かれる音がした。

「蘭ちゃん！結婚おめでとう！」

「和葉ちゃん！大阪からわざわざ来てくれてありがとう！」

「何言うてんねん？親友やる？」

「ありがとう！和葉ちゃん！」

「ところで蘭！さっきの話の続きは？」

「何？園子ちゃん？さっきの話の続きで？」

「プロポーズよ！和葉ちゃんも聞きたいでしょ？」

「プロポーズ？めっちゃ聞きたい！蘭ちゃん聞かせて！」

「えー？」

園子と和葉ちゃんの輝いた瞳に負けてしまい白状した。

「はいはい！教えますよ！」

私は園子と和葉ちゃんにプロポーズのことを話した。

控え室（新二）（前書き）

控え室での新一の話です

控え室（新一）

結婚式の控え室である一人の青年が白いタキシードの下にワイシャツを着て、蝶ネクタイを締めていて身だしなみを整えていた。

コンコン！

控え室のドアが叩かれる音がした。

「どうぞ！」

新一はそう言った。

「よう！工藤！来てやったで！」

「よう！新一！結婚おめでとう！」

西の私立探偵服部平次と元怪盗キッドの黒羽快斗が新一の控え室に来た。

「よう！お前ら！よく来たな！」

「何言うてんねん？親友の結婚式に来ないやつなんていないやろ？」

「そうそう！」

「でも服部なんてわざわざ大阪から来てくれたんだろ？」

「親友の結婚式なんやから来るに決まっとるやないか！」

「サンキューな！服部も快斗も！」

「全く黒羽くんにはがっかりするよ！」

「この甘ったるい嫌味な口調は白馬だろ？」

「白馬？」

新一は初対面であまりその人物は知らない。

「あ！自己紹介を忘れていましたね！僕は白馬探

君と同じく私立探偵だよ！工藤新一だね！噂はかねがね！」

「どうも！」

「白馬！お前は何しに来たんだ？」

「嫌だな黒羽くん僕は新一くんの結婚式を祝いに来たことと君に用があるんだ！」

「あん？」

「どういふことが説明してもらおうか？黒羽くん？」

「何を？」

「先日、怪盗キッドが引退宣言をしたてニュースがあつて日本に帰国したんだ！どういふことかな？」

「あん？んなこと怪盗キッド本人に聞けよ！」

「だから怪盗キッド本人に聞いているんだよ！黒羽くん？」

「俺が怪盗キッドだつて言いてえのか？」

「ああ！」

「はん！俺がキッドだて言う証拠あんのかよ？」

「まあいい！いずれか君がキッドだつて言う確かな証拠を見つけ出してやる。」

そう言つて白馬は新一の控え室を出ていた。

「お前白馬にキッドだつて疑われているんか？」

服部が俺にそう言つてきた。

「ああ！疑われている。」

「何で俺と服部にはお前がキッドであることを言つていたのに白馬には言わないんだ？同じ探偵なのに。」

「何か新一と服部は信用できるんだよな！同じ探偵なのに！」

「そうか！」

「ごめんな！新一せつかく蘭ちゃんとの結婚式なのに嫌なところ見せちゃつて」

「いいよ！別にそんなこと」

「そんなことより工藤お前あの姉ちゃんに何てプロポーズしたんや？」

「あ！それすごく気になっていた。」

「あん？何で気になるんだよ？」

「ええやる！教えてくれたて！」

「そうだよ！新一教えてくれよ！」

「わあーたよ！」

「おー！」

服部と黒羽は待ってました。と言わんばかりの大きな声を出していた
「あれは確か」

新一は蘭へのプロポーズのことを思い出しながら服部と黒羽に話し
始めた

控え室(新二)(後書き)

感想ください

プロポーズ（前書き）

優作と有希子番外編初登場です。

プロポーズ

新一は服部と快斗に蘭に何てプロポーズしたかを話し始めた。

「あれは確か俺が記憶を取り戻して、退院した日に蘭と米花センタービル展望レストランアルサーヌで蘭と食事をしていたときにプロポーズしたんだ」

「へえー！新一何てプロポーズしたんだ？」

快斗が新一に聞いてきた

「そこまで説明しなきゃいけないか？」

「当たり前やる！」

「わあーたよ！蘭お前を愛してるこの地球上の誰よりもだから俺と結婚してくれ！と言ったよ！」

「おー！」

服部と快斗は新一の控え室に響くぐらいの大声を出した。

「キザやな！」

「だな？」

服部と快斗は新一を思いつきりからかい始めた。

「あん？お前ら人のプロポーズを聞いていてそのセリフは無いだろう？」「だって本当のことなんやから仕方あらへんやろ？」

「ニヤロー！」

新一はジト目で服部を睨んだ。

「まあまあ！そう起こるなて！新一！」

「そくやで！短気はよくないで！」

「うるせー！」

新一は怒鳴った。

コンコン！

控え室のドアが叩かれる音がした。

「どうぞー！」

「新ちゃん！久しぶり！」

「か・・・母さん！？なんでここにいるんだよ？」

「何て息子の結婚式にこない親なんていないでしょ？」

「だったら日本に着いたなら着いたで連絡ぐらいしろよな！迎えに来てやるのに！」

「だって連絡なんてしたら新ちゃんの驚く顔が見れないじゃない！それが本心じゃねえか！」

新一は心の中でつつこんだ。

「まあまあ！新一有希子は新一と蘭くんのひとときを邪魔したくないから連絡しなかつたんだよ！」

「あ！新ちゃんいい忘れてたけれど蘭ちゃんのウエディングドレス綺麗だったわよ！」

「マジで？」

「ほー？工藤お前あの姉ちゃんのドレス姿見たいんやろ？」

「べ、別にそんなんじゃねえよ！」

「照れることねえじゃねえかよ！新一！結婚するんだから！」

「じゃあ優作さん！工藤借りるで！」

優作はニコニコ微笑んでいた。

「おいおい！どこに連れていくんだよ？」

「姉ちゃんの控え室に決まっとるやないか！」

「コラー！」

「そう怒るなよ！新一！」

新一の怒鳴り声が廊下に響き渡った。

新一は服部と快斗に強引に蘭の控え室に連れていかれた。

美しき花嫁

一方、蘭の控え室では園子と和葉に新一に何てプロポーズされたかを聞かれているところだった。

「お前のこと愛してるこの地球上の誰よりもだから俺と結婚してくれ！て言われたよ！」

「かつこいいな！工藤くん！」

「さすが！新一くんあやつらしいわね！」

蘭は顔が真っ赤になっていた。

「何顔赤くしてるのよ？結婚するんだから照れることないじゃない？」

「そうやで！蘭ちゃん照れることないやん！」

コンコン！控え室のドアが叩かれる音がした。

「蘭！あら準備整っているじゃない！」

「蘭！幸せになれよ！」

私の控え室にお父さんとお母さんが来てくれた。

「蘭綺麗じゃない！ウエンディングドレス」

「そう？」

蘭は少し照れているみたいだ。

「本当に綺麗だぜ！蘭！」

「お父さんお母さん今までありがとうね！」

私は涙を浮かべながら感謝の言葉を言った。

「今言つな披露宴で言え！」

「お父さん酔っちゃうでしょ？」

「ウー！」

「凶星ね？」

「蘭は相変わらず鋭いわね！」

園子がそう言った。

そうしている間に控え室の廊下から何か騒ぎが聞こえてきていた。

「だから！まだ言いて！」

「今さら何言つてんねん？自分の嫁さんやる？」

「そつだぜ！新一早く見に行けよ！」

ドン！

新一の背中を服部と快斗が押して無理やり蘭の控え室に押し出した。

「し……新一？どうしたの？」

「ら……蘭？」

新一は蘭の姿に見とれてしまった。

「新一？」

「あら！新ちゃん！蘭ちゃんのウエディングドレス姿に見とれてしまったのね？」

「まあ！姉ちゃんのドレス姿に見とれてしまうなんて工藤らしいで！」

服部と有希子の言葉で新一は我を取り戻していた。

「うるせえな！」

「照れることないじゃない！新ちゃん」

「ねえ！新一ドレス似合ってる？」

蘭が少し不安そうに俺に聞いてきた。

「ああ！似合ってるよ！蘭は本当に世界一綺麗だ！」

新一は不安そうな蘭に優しい笑顔を向けた。

その二人のラブラブぶりを見ていて控え室にいるみんなはからかう気配を無くしてしまった。

本番直前

新一と蘭二人のラブラブシーンを見ていたみんなはからかう気力を無くしていた。

コンコン！

控え室のドアが叩かれる音がした。

「お邪魔するぞい！新一くん、蘭くん！」

阿笠博士と少年探偵団のみんなが来てくれた。

「阿笠博士に少年探偵団のみんなまで来てくれたのね？」

私は嬉しそうにそう言った。

「蘭さん、新一さんこの度は結婚おめでとうございます！」

「光彦くんありがとうね！」

「結婚おめでとう！新一お兄さん、蘭お姉さん！」

「おい！新一絶対に蘭お姉さんを泣かせるなよ！」

「泣かせねえよ！」

新一はドスのきいた声で言った。

「歩美ちゃんに元太くんもありがとうね！」

「さすがにあのガキンチョたちの目の前でラブラブシーンは見せつけないか」

園子はほっとしているのかがっかりしているのかわからない言い方をしていた。

「ほんまにあのガキンチョたちの目の前でラブラブシーンなんか見せつけていたら気まずい雰囲気になってしまうで！」

服部と園子の会話を聞いていた灰原はからかうようにこう言った。

「あら？私は見たかったわ！蘭さんと工藤くんのラブラブシーンからかうネタには持ってこいじゃない？」

「あ、哀ちゃん。」

「お前な！」

新一と蘭は灰原の一言により顔が真っ赤になった

「新一お兄さんも蘭お姉さんも顔赤いよ!」

「否定しないということはラブラブだったんですね?」

「何で赤くなつてんだよ?結婚するんだからラブラブになるんじゃないのかよ?」

歩美・元太・光彦の一言により新一と蘭はさらに顔が真っ赤になつてしまった。

「あ!もうこんな時間じゃない!私たちは早めに式場に行つてないと!蘭キスシーン頑張りなよ!」

「園子!」

蘭は顔が真っ赤で園子に怒鳴つた。

「じゃあわしらも失礼するよ!」

阿笠博士と少年探偵団のみんなが控え室をあとにした。

「工藤くん!これからも期待してるぞ!」

「はい!」

「子どもの推理にも期待してるぞ!」

「警部まだ気が早いですよ!」

新一は苦笑いをしていた。

そして目暮警部たちも控え室をあとにした。

「じゃあ!私たちも出ていこうかしら?さあ!あなた行くわよ!」

「あん?何だよ?英理もうちょっとここに居たっていいじゃねえか?」

「蘭と新一くんを二人きりにさせたほうが蘭や新一くんの緊張も和らぐでしょう?だから私たちはもう出ていくわよ!いいわね?」

「わあ!たよ!」

小五郎はばつの悪い表情でそう言った。

「あ!おじさん!」

「あん?」

「蘭すごく綺麗でしたよ!」

「当たり前だ!俺と英理の自慢の娘なんだからな!」

「そうですね!」

「まあとりあえず頑張れよ！」

「はい！」

「お父さん、お母さんありがとう！」

新一と蘭はそう言っつて小五郎と英理を見送った。

誰も居なくなつた控え室で二人はあまり話すことが無くなつてしまつた。

長い沈黙を破つたのは新一。

「あ、あのさ！蘭俺お前を必ず幸せにさせる。これから幸せな家庭を一緒に築こうな？」

「うん！これからもずっと一緒だね！新一幸せになるうね？」

「ああ！絶対に幸せにさせる。」

新一は力強く蘭にそう言つた。

本番直前（後書き）

しばらくテスト前なのでもしかしたら更新できないかと思われます。
ご了承ください。

不安

新一と蘭二人きりで今控え室にいる。

蘭は今だに不安な顔をしていた。

「なあ！蘭どうしたんだ？そんな不安な顔しちやっつてよ！」

「ううん！何でもないの！」

「何でもなくて顔してねえよ！なあ！蘭もう一人で抱え込む必要はねえんだぞ！俺が記憶喪失だったときに俺と同じ言葉を蘭は言ってたぞ！」

「うん！実はちょっとだけ不安なんだ！」

「何がまさか俺と結婚することがか？」

「ううん！新一と結婚するのに不安なことはないわ！ただ名探偵の新一と私なんかがつりあうかどうかが不安なんだよ！」

新一は蘭の言葉で肩を落とした。

「バー口！お前はそんなんで不安になることなんてねえんだよ！逆にお前は俺にとって勿体ないぐらいの存在なんだからな！」「ありがとう！」

「蘭お前まだ不安そうな顔してるな！」

新一はそう言つて蘭の頬に軽くキスをした。

「な？」

蘭は顔が真っ赤になった。

「緊張と不安を和らげてやったんだよ！お前緊張もしてたんだらう？」

「し・・・新一」

蘭は新一にキスされたお陰で緊張も不安も和らいだ。その他にも新一にキスをされて内心嬉しかったみたいだ。

「さあ！今は軽くキスしたが口づけのほうは本番まで取っとくよ！」

蘭は新一の一言により顔がまた真っ赤になってしまった。

蘭は嬉しかったが新一に思いつきりバーカと叫んだ。

入場（前書き）

相変わらずの駄文です。

入場

「えー！これから工藤新一様と工藤蘭様の結婚式を挙行させていただきます。」

司会のアナウンスが式場に響き渡った。

「おー！」

式場にいた客は騒ぎ出した。

「それでは新郎の入場です」

司会のアナウンスにより新一が入場してきた。

先ほど蘭にキスをして緊張を和らげたが、さすがに本番になると緊張してしまうようだ。

しかし、新一は式場にいる客に緊張している姿を見られたくないために自慢のポーカーフェイスでなんとか誤魔化そうと思った。

「工藤のやつ緊張してるで！」

「そうか？工藤くん堂々としてるで！」

服部と和葉の会話を聞いていた快斗は服部と和葉の会話に突っ込んだ。

「いや！新一は服部の言ったとおり緊張してるよ！自慢のポーカーフェイスで誤魔化そうとしているみたいだが俺の目は誤魔化せねえぜ！」

「青子全然気づかなかった！」

「たつくそんなことに気づかないなんてそんなんじゃないってまで経つ

ても青子は子どもそのままだぜ！」

「な？誰が子どもよ？快斗？」

「お前だよ！アホ子！」

「言っただわね！このバ快斗！」

「あん？うるせえな！アホ子！」

「バ快斗！」

快斗と青子の些細な口喧嘩に服部と和葉は苦笑いをしていた。

次に新婦の入場です。

司会のアナウンスにより蘭が入場してきた。

「うわー！蘭お姉さん綺麗！」

「何言つてんだよ？歩美さつきも蘭姉ちゃんのドレス見に行っただる？」

歩美と元太の会話を聞いていた灰原は会話に加わった。

「バカね！今の蘭さんの表情を見てごらんさい！蘭さん笑ってるでしょ？さつきよりも輝いている笑顔でだから今の蘭さんはさつきよりも綺麗に見えたのよ！」

「はあー！」

元太は少しだけ納得したような返事を返した。

「ん？」

園子が新一の様子を見ていた。

来賓の方々が新一の妻である蘭に見とれていたのだ。

その様子を新一は来賓の方々にジト目で睨んでいた。

その新一の表情を見逃さなかった蘭はこう思った。

他の男がちよつとだけ蘭に見とれていたただけなのにあんなジト目で睨んでいるなんてあやつどんだけ蘭に独占欲あるのよ？

新一が来賓の方々にジト目で睨んでいることに気がついた蘭は来賓の方々に失礼でしょ？と思ったが蘭はなぜ新一が来賓の方々にジト目で睨んでいる訳がわかったみたいで改めて蘭はこう思った。

愛されているんだと。

蘭は新一の肩をつついて自分のほうに新一体を向かせた。

「私を愛してくれてありがとう！」

私は優しい笑顔を新一に向けてそう言った。

「ら・・・蘭バ一口！それはこっちのセリフだ！俺を愛してくれてありがとう！」

新一は優しい笑顔を私に向けてそう言った。

そして蘭は泣いている自分の父親の姿が見えた。

「うー！蘭が行ってしまおう！」

「ほらほら泣かないの！蘭がこつちを見てるわよ！」

英理はそう言つて小五郎にハンカチを差し出し、涙を拭つた。

「いい雰囲気じゃないか！おじさんおばさん」

新一はそう言つた。

「うん！そうだね！」

お父さんとお母さんの様子を見ていて私はこう思つた。

これからは新一と幸せな家庭を築くので私はお父さんとは別の暮らしになります。だからお父さんお母さん二人で仲良く暮らしてね！

お父さんお母さん今まで私を育ててくれてありがとう！

私は改めて自分の父親と母親に感謝した。

結婚式（前書き）

ついに結婚式の場面です本当にアイデア考えるの大変でした。

結婚式

ついに新一と蘭の誓いのキスをする場面になった

新一と蘭二人が並んだとき神父が新一に、

「工藤新一貴方は工藤蘭を病める健やかなるときも死が二人を分かつまで愛し続けることを誓いますか？」

と問いかけた。

新一はその問いに確信を持って

「誓います！」

と力強く言った。

次に神父が蘭に問いかけた。

「工藤蘭貴方は工藤新一を病める健やかなるときも死が二人を分かつまで愛し続けることを誓いますか？」

蘭も確信を持って

「誓います！」

と力強く言った。

新一と蘭が永遠の愛を誓った後、二人は指輪の交換をした。

「それでは誓いのキスを……」

と神父が言うと

園子、青子、和葉、哀、歩美、有希子、優作、小五郎、英理、快斗、服部、新一と蘭の高校時代の友人は待つてましたと言わんばかりで視線が新一と蘭の方に向いた。

そうして新一と蘭は誓いのキスをした。長い長いキスだった。

その様子を見て小五郎はそっぽを向いて

「ふん！蘭を新一の嫁に出してやったんだからもう蘭を泣かせたらあいつただじゃ済まねえよ！」

その小五郎の話を聞いていた英理はクスと笑い、

「大丈夫よ！新一くんは必ず蘭を幸せにするわよ！」

「ふん！そうだかね？」

「あら！私とあなたに新一くと蘭が結婚の挨拶をしに行ったとき蘭をもう泣かせません！て新一くん言つてたじゃない！」

「言葉を出すだけじゃなくてそれを行動に出してほしいな！」

「まあ！そうね！今私たちができることは新一くと蘭を温かく見守ることね！」

「ふん！」

小五郎は意地を張っていた。

そして今は予定には入っていなかった快斗のマジックショーをやっ
ていて、マジックショーも終わりを迎えるところだった

「それでは二人の永遠の愛を誓ってワン・トゥ・スリー！」

快斗はそう言つて指をならし、新一と蘭の目の前で帽子から鳩を出
した。

「わぁー！快斗くん！うまいね！」

「本当にうまいぜ快斗！」

「サンキュー」

快斗は新一と蘭に誉められて、とても機嫌が良い
そして式も終わりを迎えるところだった。

「おーい！工藤もう姉ちゃんを泣かすなよ！」

服部が真面目に新一にそう言った。

新一は改めてこんな信用できる親友や仲間たちに出逢えて良かった
と思った。

そして蘭を抱えた。

「ちよつと！し・・・新一？」

「バー口！結婚式にお姫様抱っこは当たり前だろ？」

「見せつけてくれるな！」

快斗はここぞと言うばかりに新一をからかった。

「新一くん！絶対に蘭を幸せにしなさいよ！幸せにしないなら許さ
ないから！」

「当たり前だろ？絶対に蘭を幸せにする！」

そのセリフに新一によって抱えられた蘭は太陽のように輝く笑顔を

新一に向けた。

「それでは退場です。」

司会のアナウンスによって新一と蘭は式場を退場して自分たちの控え室に戻った。

二人だけの誓い

新一は蘭をお姫様抱っこしたまま自分たちの控え室に戻った。そして椅子に蘭を座らせた。

今の蘭は少しだけ顔が真っ赤だ。

二人のあとをついていた哀と園子は

「それじゃあ披露宴までお二人でごゆっくりと！」
と言い、控え室を出ていった。

しばらく静かな時間が流れた。

「良かったね！結婚式無事に終わって！」

「あ、ああ！」

あまりにも静かすぎる新一に不信感を持った蘭は新一にまた話しかけた。

「し・・・新一？」

「蘭にもう一つ大切な言葉を言いたくてな！」

「え？」

新一は一呼吸置いて蘭に

「工藤蘭さん！僕工藤新一は死んでも蘭さんを愛し尽くすことを誓います！」

と力強く言った。

蘭は新一の言葉にクスツと笑った。

「ら、蘭？」

「だって新一も私が言いたかったことと同じだったから！それにさっきの誓いの言葉の二人が死を分かるときまでというのがちょっと悲しくて切なく感じたんだ！」

「マジで？俺も同じこと考えていた！」

「うん！だから私にも言わせて！」

蘭も一呼吸置いて

「工藤新一さん！私工藤蘭も死んでも新一さんを愛し尽くすことを

誓います！」

蘭の誓いの言葉を聞き、新一もクスツと笑った。

「さっきの誓いの言葉よりもこっちの言葉のほうが俺たちにとって優先だな？」

「だね？二人だけの誓いだもんね！」

新一はニヤと笑い

「それじゃあ誓いのキスを」

と言った。

「え？」

恥ずかしがりやの蘭は顔が真っ赤になった。

「別に誰も見てないからいいじゃん？」

「うん！」

蘭は顔が真っ赤のまま新一とキスをした。

さっきの誓いのキスよりもずっと長い長いキスを

ガチャ！

控え室のドアが開いた。

「お二人さんそろそろ時間よ！」

園子と哀が入ってきた。

偶然哀と園子は新一と蘭のキスシーンを目撃してしまった。

新一と蘭は哀と園子に見られてしまい、二人とも顔が真っ赤になった。

それから哀と園子にキスシーンまでのことなどしつこく新一と蘭に聞いてきたせいで主役の二人が披露宴に多少遅れてしまい、披露宴が始まる時間が少々遅れてしまった。

二人だけの誓い（後書き）

あと二話か三話ぐらいで多分完結するかと思います。

披露宴& a m p ;鈴木園子のスライドショー（前書き）

本当はテスト前なので更新しない予定でしたが部活の休憩中という
すきま時間に書き上げました。

披露宴& a m p ; 鈴木園子のスライドショー

新一と蘭は園子と哀に控え室でのキスシーンを目撃されてしまい、しつこく質問され、披露宴の始まる時間が遅れてしまった。

「はい！じゃあ聞きたいことは聞いたから新一くと蘭は披露宴の会場に行くわよ！披露宴の会場は別会場だから！」

園子は俺たちにそう言った。

「じゃあ！工藤くん！私と鈴木さんはさきに行ってるわよ！」

「おう！」

園子と灰原はそう言って控え室をあとにした。

新一と蘭は顔が今だに真っ赤のままだった。

新一と蘭は10分後に控え室を出て、披露宴会場に向かった。

結婚式場を出たあと赤いオープンカーが式場の前に止まっていた。

そのオープンカーには新一の両親が乗っていた。

「新ちゃん！蘭ちゃん！急いで！早く！私たち披露宴に遅刻してるのよ！」

「か、母さん？父さん？披露宴には来れないって言ってたじゃねえかよ！」

「予定変更よ！さあ早く乗って！」

「ああ！」

新一と蘭は有希子にそう言われしげぶオープンカーに乗った。

優作は急いでオープンカーを走らせた。

「ところで新一？何でこんなに遅くなったんだ？」

「え！？」

新一は顔を赤く染めた。

「その様子だと園子ちゃんが言ったことは本当のようね！」

「え！？」

今度は蘭が顔を赤く染めた。

「園子ちゃんと哀ちゃんに聞いたわよ！新ちゃんと蘭ちゃんが結婚

式が終わったあとに控え室でキスをしてたてることが

「な!？」

新一と蘭は顔が真っ赤になった。

「そんな照れることないじゃない 新ちゃんと蘭ちゃんはもう夫婦なんだから」

「ほら着いたぞ!新一、蘭くん!披露宴会場に!」

披露宴会場があまりにも素晴らしくて蘭は感動していた。

「わあー!素敵」

「ほら!蘭急ぐぞ!」

新一は蘭の手を握って走り出した。

「ちよつと!し、新一?」

蘭は顔がまた真っ赤になった。

新一と蘭は大急ぎで披露宴会場に向かった。

「よお!工藤遅かったで!お前どうやら姉ちゃんとキスでもしてたんやろ?」

「う!」

「園子ちゃんと哀ちゃんから聞いたぜ!新一!蘭ちゃんと新一が控え室でキスしてたてことを!ラブラブだな!ヒューヒュー!」

快斗と服部が思いつきり新一をからかった。

「うるせえ!」

一方蘭もからかわれていた。

「蘭ちゃん!工藤くんと控え室でキスでもしてたんやろ?」

「青子も知ってるよ!」

蘭も新一同様顔が真っ赤のようだ。

「照れることないやん!蘭ちゃん!もう工藤くんの奥さんなんやから!」

「そつだよ!蘭ちゃんもう照れることないんだよ!」

蘭と新一のからかいが終わったあと、披露宴が始まった。

「はい!これから!披露宴を始めたいと思います。」

司会の園子はマイクを使ってそう言った。

「げ！？園子が司会？何かろくでもないこと考えてそうだな！」

「もう！新一！園子に失礼でしょ？」

「だってよ！本当のことだろ？」

「そういうこと言っちゃ駄目！わかった？新一？」

蘭は上目遣いで俺にそう言った。

「へいへい！」

「それではまず始めに新郎新婦思い出のスライドショーからです。」

「へ！？」

新一と蘭は驚いていた。

新一と蘭は我に返り新一が司会の園子に怒鳴った。

「おい！園子！そんなの予定に入ってねえぞ！」

「だって教えてませんもん」

司会の園子が面白そうにそう言った。

「ニヤロ！」

新一は園子を睨んだ。

「それではまず最初の写真はこちらです。」

一枚目に出てきた写真は新一と蘭が幼稚園の頃の写真だった。

「えー！この写真は蘭と新一くんが初めて出逢ったときの写真です。新一くんのお母さんのお話によると蘭が新一くんに初めて出逢ったときに新一くんのことがかっこよすぎて新一くんの頬にキスをしたそうです。本人の新一くと蘭はこの頃は全く覚えていないみたいですね！」

園子が新一と蘭をからかうような口調で言った。

新一と蘭は園子の口調により顔が真っ赤になった。

「次の写真はこちらです。この写真は新一くと蘭が小学生だったときに蘭が遠足で迷子になった頃の写真です。新一くんは迷子になってしまった蘭を必死に探し回り、蘭を先生たちのところに連れ戻した写真です。」

新一と蘭はまだ顔が真っ赤のままだった。

「次の写真は新一くと蘭が高校一年生の頃の写真です。新一くん

がNYで熱を出した蘭の看病をしている写真です。いやこの頃から奥さんを大事にしていたことがよくわかりますね！」

「次の写真は新一くと蘭が高校三年生の頃の写真です。新一くんは高校二年生の頃からある事件の調査で出かけて蘭を泣かせてきた頃で蘭と新一くんが高校三年生のときに新一くんが帰ってきて蘭を米花センタービル展望レストランに食事に誘って告白して恋人になったときの写真です。そして恋人になった新一くと蘭はこの展望レストランでキスをしたみたいですよ！」

園子がまた新一と蘭をからかうような口調で説明をしていた。

「次の写真は……」

園子が長々と説明をしているのを見ていて恥ずかしくなった新一と蘭は披露宴会場をあとにした。

披露宴&mp・鈴木園子のスライドショー（後書き）

アドバイスを感想ください！

夜景の中での思い出（前書き）

今日も部活の休憩時間と下校時間というすきま時間を使い、書き上げました。

夜景の中の思い出

新一と蘭は園子の冷やかし混じりのスライドショーを見ていて恥ずかしさのあまり披露宴会場をあとにした。

「わぁー綺麗な夜景」

蘭はご機嫌のようだ。

「たつく！園子のやつ相変わらずだな！」
「だね？」

「まあ！今さら披露宴会場に戻っても園子の冷やかし混じりのスライドショーを見るはめになるんだからこのまま夜景見てようぜ！」

「うん！ハックション！」

蘭はくしゃみをした。

「おいおい！大丈夫か？」

「あ！うん！大丈夫よ！」

「ウエンディングドレス薄いんだろ？こうなるかと思ってコート持ってきたからこれ着るよ！あ！でもこのコート男物なんだ。我慢してくれるか？」

「ありがとう！新一！でも私が着ちゃったら新一が寒いでしょ？」

「いいよ！気にするなて！」

「でも今日からあなたは一家の大黒柱なんだから風邪引かれちゃ困るよ！」

「バー口！いいから羽織つとけ！」

「でも」

「いいから！」

「もう！意地っ張り！」

「そりやお前だろ？」

「クスクス！ありがとうね！」

「気にするな！」

新一は私に笑顔でそう言った。

「ねえ！新一」

「ん？」

「夜景で私たちにとっていっぱい思い出あるよね？」

「ああ！初めて夜景を見たのは俺と蘭が高二だった頃に展望レストランで食事に誘ったときだったよな？」

「うん！」

「あのときは俺お前を泣かせてばかりだったよな？蘭今さらだけどあるとき泣かせてばかりでごめんな！」「もういいよ！新一謝らなくて！」

蘭は俺に優しい笑顔を向けてそう言った。

「そして俺がコナンから新一に完全に戻ったあとに蘭とまた展望レストランで食事をして俺が蘭に告白して恋人になったんだよな！」

「そうだったね！あのときは嬉しかったよ！本当に新一が私のことをこんなに関心してくれていたなんて夢にも思っていなかったんだよん！」

「ああ！俺もコナンになっちまったあの日に蘭がこんなに俺のことを想ってくれていたなんて思ってもいなかったよ！マジで嬉しかったぜ！」

「でも私たちが幼馴染みから夫婦になるんだね？夜景を見ているとしみじみしちゃうね！」

「ら、蘭！でもこれからたくさん思い出つくって行くぞ！たまに喧嘩してまたすぐに仲直りしてこれから幸せな家庭を築いていくうな！」

「うん！」

蘭と新一はしばらく見つめあい二人は夜景のなか口づけを交わしたさつき控え室でした口づけよりずっと長い口づけを交わしていた。

「全くいくら結婚したからって言ったてこういうのは誰も見ていないところでやってくれるかしら？」

聞き覚えのある冷たい声が聞こえてきて新一と蘭は慌てて唇を離し

た。

「あ、哀ちゃん？」

「お前どうしてここに？」

二人は哀にキスシーンをまた見られてしまい顔が真っ赤になっていた。

「披露宴会場で主役のあなたたち二人がいないことに気がついて探し回ったのよ！まあ！本当はもうちょっと見ていたかったけれどね工藤さんと蘭さんのキスシーン。」

哀の一言により新一と蘭は顔が赤のまま、固まってしまった。

「あら！顔が赤いわよ！お二人さん！」

哀がまたからかったせいで新一と蘭はさらに顔が赤くなってしまった。

「ゆ、夕日」

「夕日のせいなんて言えないわよ！もう夜なんだから！」

「ウー！」

新一と蘭は何も言えないまま下を向いてしまった。

「まあ！いいわ！早く会場に戻らないと鈴木さん怒るわよ！」

新一と蘭は哀にそう言われ、急いで会場に向かって走り出した。

新一と蘭が会場を抜け出したのに気づいたのは優作と哀だけだった。

破れない誓い（前書き）

相変わらずの駄文です。

今日もすきま時間を活用し、書き上げました。

破れない誓い

新一と蘭は急いで披露宴会場に向かって走り出した。

新一と蘭が会場に戻った頃には披露宴ももうそろそろ終わりを迎えるところだった。

「ふー！ギリギリセーフかな？」

「良かった。間に合って！」

新一と蘭は息を切らして会場に戻ってきてそう言った。

そして披露宴が終わった。

新一は小五郎と英理と目が合った。

「おじさん！おばさん！」探偵ボウズ蘭のこと頼んだぞ！蘭を絶対に幸せにするんだぞ！」

「新一くん！私も小五郎と同じこと言わせてもらおうよ！蘭を必ず幸せにさせてね！」

「はい！必ず蘭を幸せにします！」

新一は大きな声ではっきりと小五郎と英理に誓った。

「新一くんなら蘭を任せても大丈夫のようね！」

英理がそう言ったあと小五郎がぶすとした口調でこう言った。

「蘭！探偵ボウズのことを嫌になったらいつでも俺と英理のところに戻ってきていいんだぞ！」

「ありがとう！お父さん！でも私、新一のこと嫌になることなんてないと思うよ！それにすぐに逃げちゃったら私すぐに逃げちゃう癖がついちやうからよくないよ！」

「バー口！ときには逃げることも大切なんだよ！」

「ありがとう！私絶対に新一と幸せになるね！」

「蘭、おい！探偵ボウズ二度と蘭をもう泣かせなよ！」

「はい！もう蘭を泣かせません！」

「し、新一これから一緒に幸せな家庭を築こうね！」

「ああ！一緒に幸せな家庭を築こうぜ！」

「新ちゃん！蘭ちゃんに無理させちゃいけないわよ！」

「わあーてるよ！」

「蘭くん！前にも言ったが新一は君以外の女性は瞳に映っていないだろ？から浮気の心配はないけれどこんなぐうたら息子のことを頼んだぞ！」

「そんな！ぐうたらなんて私新一のことそんなふうにしたことなんてありません！」

新一と蘭は自分の両親たちに頭を下げて披露宴会場をあとにした。そして新一と蘭は工藤邸に戻った。

破れない誓い（後書き）

この小説もこの話を含めてあと二話で完結です。

初めての夜（前書き）

いよいよ完結です。

こんな駄文しか書けない作者を見守っていてくださいますありがとうございます。

初めての夜

新一と蘭は新一の両親のオープンカーにより工藤邸に送られた。

工藤邸に着いた新一と優作はコーヒーを蘭と有希子は紅茶を飲んでいてゆつくりと休んでいた。

「そうだ！父さん！いつアメリカに帰るんだ？」

「あら！新ちゃん蘭ちゃんと二人きりで過ごしたいから私たちは早くいなくなつてほしいのね？」

「そんなんじゃないよ！空港まで見送らなきゃならないだろ？」

新一は顔を赤く染めてそう言った。

「まあ！新一見送りはいいよ！」

「え？何ですか？」

蘭は不思議がつて優作と有希子に聞いた。

「明日帰ることになっていて、しかも明日の朝一番の便に乗ることになってから蘭ちゃんと新一にとってはつらいだろう？だから見送りはいいよ！それに今日はホテルで泊まるから」

「何でホテルなんか泊まるんだよ？」

「あら！新ちゃんと蘭ちゃん今日は結婚してから初めての夜でしょ？だから二人きりで過ごさせようかなと思つたからに決まつてるじゃない？今日は甘い夜を過ごしてね」

有希子の言葉で蘭と新一は顔が赤くなつた。

優作と有希子が工藤邸を出たあと蘭がすぐに新一に話しかけた。

「ねえ！新一！」

「何だ？蘭？」

「私たち今日から夫婦だね？」

「ああ！もう幼馴染みでも恋人でもねえよ！俺は蘭の夫、蘭は俺の妻だよ！」

「何か嬉しい！」

蘭は笑顔で俺の肩に頭をつけた。

「俺もマジで嬉しいぜ！」

新一と蘭は笑いあつた。

「これからもよろしくな蘭！」

「これからもよろしくね新一！」

二人の間には幸せな時間に包まれた。

—————END—————

初めての夜（後書き）

次回作は新一と蘭の新婚旅行の小説を書こうと思っています。
これからも応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9738o/>

失った記憶番外編

2011年10月8日01時58分発行